2010.06.23 更新

11の講義内容

手塚治虫の作品『鉄腕アトム』―電光人間の巻―

萩原　義雄

はじめに

科学まんが『鉄腕アトム』―「電光人間の巻」―は、雑誌「少年」昭和三十年新年号付録に所載されました。作者手塚治虫は、この本の見開きのなかで「鉄腕アトム」をはじめてよむみなさんへというメッセージを以てこの作品を簡潔に解説しています。

みなさん、こんんちは。ぼくの生まれたのは五年前の春。おとうさんは天馬博士という、科学省のえらい学者でした。天馬博士にはトビ男というぼうやがいましたが、トビ男くんが不幸にも交通事故でなくなったので、トビ男くんそっくりに、ぼくがつくられたのです。ぼくがロボット人間第一号というわけです。

そのころはいまみたいに、ろぼっとが人間といっしょに、くらすなんて思いもよりあせんでした。でも、だんだんロボット文明が進んで、いまでは東京の人口の三分の一は、ぼくたちのなかまです。でも空をとべたり、十万馬力をだせたり、よくきこえる耳をもっているロボットはあまり

いません。

いま、ぼくは東京の雑司ヶ谷に、一年あとで生まれた、ロボットのおとうさんとおかあさんといっしょにすんでいます。そして、ヒゲオヤジ先生やタマちゃんのいる学校へかよっています。

どうぞよろしく。

と、こんな具合になっています。次に「週刊少年」一月一日号が所載されたという形式に基づいて、この「電光人間」の巻が始まるのです。なんと、ここにも見開きに広告もどきが三つ用意されています。上段に横書きで「修学旅行は安全な人工衛星へ／団体受付／東洋宇宙旅行株式会社／［］」、下段には二つ右に横書きで「３００才生きたいとおもいませんか？／生命の原動力／不老長寿薬驚異的完成！／強力フエニックス錠／サトウノギ製薬株式会社／［三］」、左に縦書きで「上下左右すべて立体スクリーンの新設備！これぞ映画界の新星シネマスーパー・スコープ登場／**ジラゴ**／西宝スペクタル巨篇／近日ロード・ショウ／［西宝］」という手塚さんならではの仮想広告がここに描かれています。そして、愈々「電光人間」の始まりです。

この電光人間は、実はＨ・Ｇウエルネズの作科学小説『透明人間』をモチーフにして、人型ロボットの「透明人間」が引き起こす事件を同じロボットであるアトムがこの姿無き電光人間に立ち向かうお話なのです。

みなさんは、「透明人間」について、なにかごぞんじでしょうか。たぶん、おにいさんやおとうさんなら、H・G・ウエルズのかいた、科学小説「透明人間」をごらんになったことでしょう。これはある薬をのめば、人間の肉も骨も、ガラスのようにすきとおってしまうという小説でした。

しかし、こんな魔法みたいな薬は、どんなに科学がすすんでも、つくられそうもない。だから透明人間なんて、およそ夢物語なのだ。

だが、ただひとつ見えない人間をつくる方法がある。それは、ロボットだ!!

紛失したロボット芸術

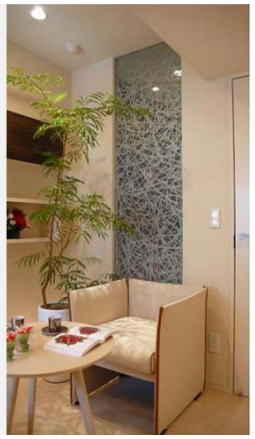
事件の推移をパノラマ風にして描き出しました。

人間の文明が作り出したロボットの博覧会場です。

この齣で「ペーパー・ガラス」の発明者、我田氏による「ペーパー・ガラス」を用いたロボットが出品されたのです。では、現実社会である私たちの生活空間にこの「Paper Glass」の商品はあるのでしょうか?ネット検索をしてみるとその品物が見えて来ます。

ペーパーガラス　http://www.h-trading.co.jp/ig/washi_image.html

Paper Glass



手塚さんの描き出した「ペーパー・ガラス」は、「さわらないかぎりどこにあるのかわからない、ゆうしゅうな硬質ガラスです」というものでした。現実は壁やドアなどを演出する室内空間を彩るものとして用いられております。

へへへへ！とわらう男

窓に足をかけ新聞記事に目を通す一人の人物がなにやら独り言をつぶやいています。耳を傾けて聞いてみましょう！「世界的芸術品ペーパー・ガラス製「電光」ゆくえ不明か！」「なるほどねえ、目にみえないからさがすのもたいへんだろうな」

この「へへへへ」とわらう男の正体は、「怪人二十面相」ではない「スカンク・草井」と名であることをヒゲオヤジ探偵に電話で告げています。

ヒゲオヤジ探偵の電話越しに喋る「罵倒語」表現に注目してみましょう。「バカタレ、マヌケ、ヒョットコ、デクノボウ、三かくやろう、デコボコあたま」と次第に人の面相表現へと展開していきます。ここに抜けている罵倒表現として「アホ【阿保】」がありますが、関西人が「莫迦」というより、この「アホンダレ」と云われるのが最も嫌がることばではないでしょうか？罵倒語表現について分析することもお薦めです。

通り魔電光

鳥瞰角度で街路に立ち尽くして会話する人々が描かれています。この画面から、季節感が読み取れることは言うまでもありません。では、どのようなところに季節感を見出すことが出來ますでしょうか？ひとつお考え願います。

鳥瞰構図は最後の齣にも活きています。陽が西に傾く頃合いを人影を以て見事に表現しています。さて、この齣からも少しく学習することにしましょう。そうです。方位を見極めてみることができるのです。

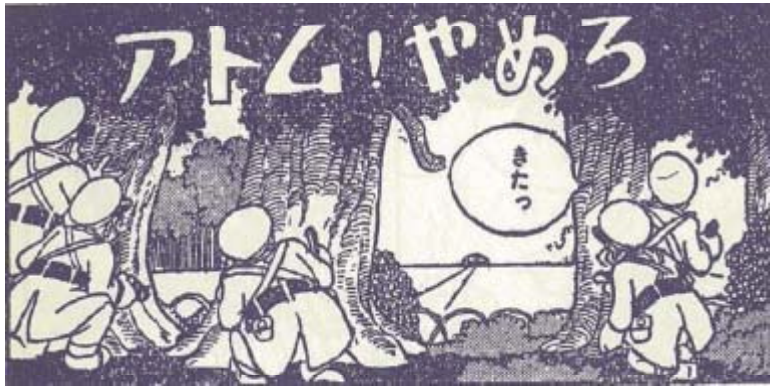
マリ子ちゃん

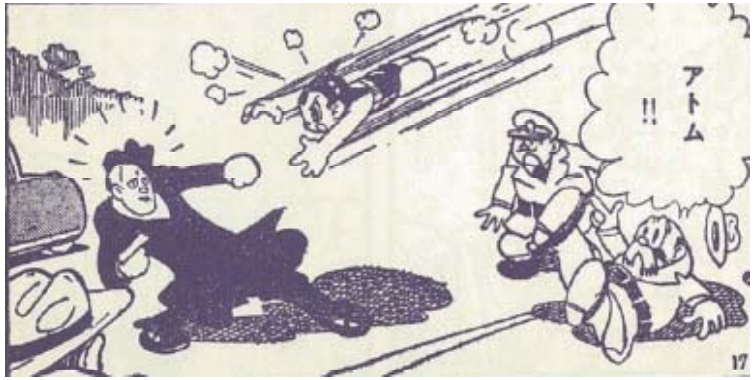
雨模様のシーンです。「ザー／ザザー／ザー／ザー／ザ」といった雨の線画に混じって表現される雨音の象徴音がこれを引き出しています。

スカンク登場

にえきらぬ先生

新聞記事を3コマでその事件情報を表現するこの新聞は三紙ともこの事件を報道していてその記事の扱い方に注目してみましょう。何かがどう異なっているのか、ご自身で読みとってみましょう。





アトム！やめろ

アトムがいよいよ悪逆なスカンクに立ち向かいます。ですが、ヒゲオヤジ探偵は、なぜかアトムに対して、「やめろっ、やめろっ」と言い続けています。なぜなのでしょうか？

アトムが見えない電光人間と格闘している場面がこの４コマに描かれています。ここに見えない電光人間が居るわけですから、この電光人間をどうぞ描き出して見ては如何でしょう。

ヒゲオヤジ探偵の悪口表現は、「おけがもくそもないもんだ。オタンコナス」と云う親愛語でもあります。「オタンコナス」ってどんな意味か知っていますか？

小学館『日本国語大辞典』第二版に、「**おたんこなす**〔名〕「おたんちん」に同じ。＊混血児ジョオヂ〔一九三一〕〈浅原六朗〉三『ああまた、オタンコナスから？』（ホテルの女達は、ジョオヂのことを不幸にもかう綽名してゐた）」【**発音**】〈標ア〉［ナ］→「**おたんちん**」（形動）人をあざける語。のろま。まぬけ。特に、寛政・享和（一七八九～一八〇四）頃、江戸新吉原では、いやな客をさしていった。おたんこなす。」とあります。

たずねてきた怪人

この二つのシーン本当に胸を打つモノがあります。

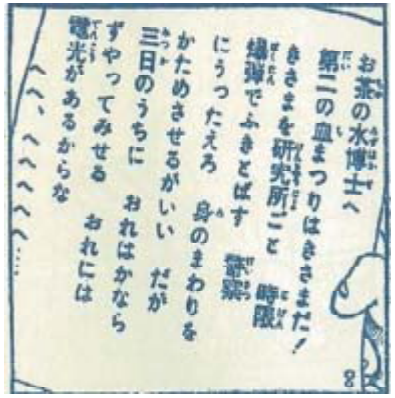
アトムが電光に語る「ロボット観」がここに表現されていますね。そうなのです。「人にイイツケラレタコトダケシカシラナイノ」と云う電光にアトムは云います。「それじゃあ百年まえのロボットとおなじだい。」「いいかい、いまのロボットは、自分でものを考えたり、したりできるんだよ。人にいいつけられなくなったって……きみもだよ！」と将に究極の極みを伝えたのです。

ゆうれい東京をあるく

降服はせぬ

「コウフク」という語を漢字で表記すると、「降伏」と「降服」の二とおりの表記法が用いられています。この語はどのように異なるのでしょうか？岩波の『広辞苑』第六版には、「降伏・降服」を「降り伏すること。敗戦を認め敵に服従すること。降参すること。「全面―」→ごうぶく。」と表現していますが、これではその差異が見えて来ません。

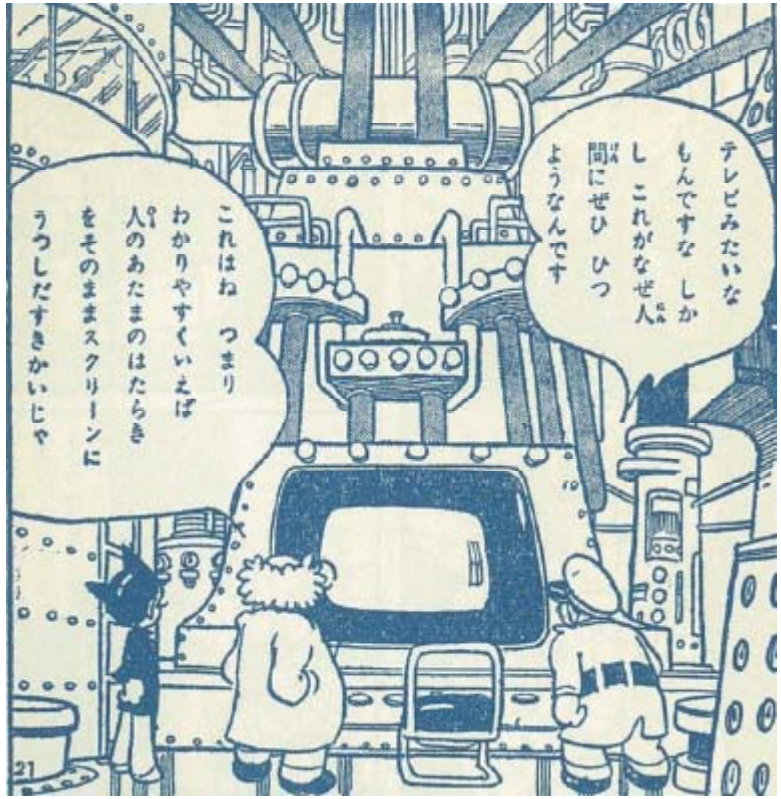
★アトムのスカンクのあじとでの大暴れの立ち回り行為は、たいそう派手に描かれています。良い人間と悪い人間を瞬時に見極め、このように悪人を容赦なくたたきのめすアトムの人に対する行動がここには見えています。



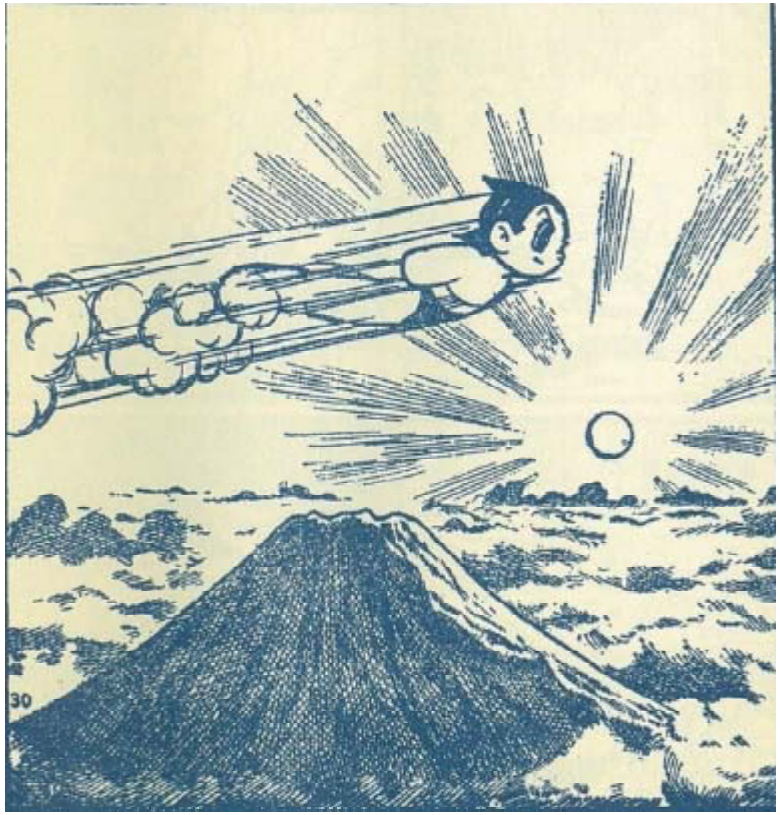
いがいな法廷

★この最後の掛け声ことば「アラヨーッ」ってどんなときに遣うことばなのでしょうか？ここでは、「号外」を配るというよりバラマキながら叫んでいます。

エクトサイコスコープ



ここに一連の電光の最後の言動が描かれていきます。アトムにペンキを塗られた足ですから隠れにくくなっては居ます。このことで電光は雪道を行くとき、警視庁の放った電磁分解銃で撃たれてしまうのです。



★新年号にふさわしい初日の出、冨士山を上から見下ろす高さで、さらに其上を東から西へ向かって飛行するアトムが描かれています。ジェット噴射で、大気中の寒さからでしょうか、白煙を後ろに残してアトムは目的地に向かうのでしょう。

「週刊少年」という宣伝文句を後に……。